

京都駅でみつけた庭園跡

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 近鉄京都駅のターミナル整備工事に先立つ発掘調査が2008年5月から約1年間実施され、平安時代から鎌倉・室町時代の建物跡と泉・池・井戸など数多くの遺構が検出されました。今回は、3箇所で検出された泉や池などの庭園遺構について紹介したいと思います。

調査地の変遷 調査地は平安京南東部に位置し、左京八条三坊四・五町と呼ばれていました。文献史料によれば、西半部の「四町」では、平安時代末期に関白藤原忠実が阿弥陀堂を建立して丈六の阿弥陀如来像を安置しており、東部の南北2箇所には鳥羽天皇内親王八条院の所領（八条院領）が設けられました。鎌倉時代末期には八条院領は東寺に寄進され、東寺領八条院町が成立しました。

また、東半部の「五町」では、平安時代後期から末期にかけて白河法皇の寵臣で「夜の関白」と称された藤原^{あきたか}顕隆と、その子^{あきとし}顕能の八条町尻第、鳥羽天皇中宮の美福門院の御所、二条天皇の仮皇居、平清盛の弟である権大納言平頼盛の八条室町亭（池殿）などに関する史料が残されています。

泉1 平安時代中期から後期の泉跡です。南北3.4m、東西2.6mの規模で楕円形をしており、深さは約0.6mありました。泉の湧き



泉1 石を詰め込んだ湧き出し口（平安時代中期から後期）



泉2 甕の口縁部を利用した湧き出し口（平安時代末期から鎌倉時代後期）



泉3 周囲に石敷きのある湧き出し口（鎌倉時代前期）



平安時代の池の遺水



鎌倉時代の池

出し口である底面は径0.7~1.0mの楕円形で、中には径3~20cm大の石を詰め込んでありました。泉を設けた庭園を備える邸宅の存在が想定できますが、残念ながら文献史料にはこの時期に造営された邸宅に関する記録はありません。

泉2 平安時代末期から鎌倉時代後期の泉跡は、石敷の中央部に泉の湧き出し口として甕の口縁を埋めてありました。石敷は東西1.9m、南北1.3mの規模で、拳大の石を楕円形に敷き詰めており、甕は口径48cmの常滑産焼締陶器の口縁部のみを用いていました。口縁は土圧により破損していましたが、その破片が甕内の埋土から出土しており、完全に復元できました。石敷の中央部は浅鉢状にやや窪んだ状態であり、溢れ出した湧き水の水面下に湧き出し口の甕口縁をみせるという、鑑賞を目的とした趣向から工夫された造形の泉跡です。

この泉に類似した文献史料に、四天王寺に伝わる『扇面法華経』があります。泉を囲んで女や子供たちが沐浴や洗濯をしたり、湧き水で喉を潤している絵があり(巻

6扇2)、埋め甕の口縁とみられる泉の口から湧き水が溢れ出している描写は、この泉の情景と重なります。

泉3 泉1の東側で検出した鎌倉時代前期の泉跡で、周囲に建物基礎のような石敷がともなっていました。石敷は東西約8m、南北約9mの規模で、方形に近い形をして拳大の石を敷き詰めており、短冊形が並列したような部分もありました。泉跡は石敷中央やや西寄りに位置し、径2.2m、深さ0.6mの播鉢状の窪みになっており、底から中程にかけて拳大の石を詰め込んでありました。そして泉跡の周囲には径5cm前後の白色の丸い礫(石英)が散在していました。

文献史料によると、鎌倉時代前期の四町東南部は八条院領とありますが、内部の詳しい様子については記録がなく、今回の調査から泉をとまなう庭園を備えた大規模な邸宅が造営されていたことが想定できます。

新旧の池 泉2の西側では、平安時代後期から鎌倉時代前期の池跡を検出しました。池跡は途中で改修されており、新旧2時期に区

別できました。平安時代のものは、北東から南西方向に流れる浅い水路の底に景石を設け、白砂で化粧を施した池の遺水^{やりみず}でした。幅は北で8.5m、南で3.7mです。この旧池を埋めて造られた鎌倉時代の池では、洲浜状の石敷護岸を一部で検出しました。いずれも大規模な邸宅の造園技術に相当する工法です。

おわりに 文献史料から、旧池は平安時代後期の平治年間(1159~1160)に藤原顕能の八条町尻第を受け継いだ美福門院御所の時に造られ、平安時代末期に平頼盛が新造した八条室町亭でも改修されて存続していたと考えられます。また、前記の泉2は、八条室町亭の造営時に庭園の新たな意匠として整備されたものと考えられます。

以上のように、今回の調査で検出した庭園遺構から平安時代中期から鎌倉時代後期にかけて、左京八条三坊四・五町には庭園をとまなう大規模な邸宅が建ち並んでいたことが窺えるようになりました。

文献史料の記述が、発掘調査によって裏付けを得た結果といえるでしょう。(長戸 満男)